

講演タイトルは「日本における金管アンサンブルの発展と歴史」となっていますが、全国的・学術的な展開を視野に入れるのは大変難しい事になりますので、私自身の身の回りで起きた様々な体験・経験を通してお話して行きたいと思っています。という事は、多少自慢話も含まれる可能性があるという事になってしまいますが、ご了承下さい。

さて、その発展の流れを時代的にみると、年代は 1970 年代、今から 50 年程前の話になります。ここにお集まりの方々の中には、まだこの世に存在していない方も多いかもかもしれません。1970 年代の日本や世界の社会的な情勢はここでは触れませんが、戦後、昭和の安定期に入った頃で、色々な情報も少しずつ豊かになってきた頃です。今回の話は、その時代での金管アンサンブルを取り巻く情報を大きく 3 つに分けました。まず、

- 1、LP レコードの音源からの情報
- 2、来日演奏家によるステージパフォーマンスからの情報
- 3、実際に出版された・されていた金管アンサンブルの為の楽曲・楽譜からの情報。

別の言い方をすると紙に書かれた楽譜です。

以上 3 つのポイントで話を進めて行きたいと思いますが、当然、現在の様なデジタル化されたパソコンからの情報は全く無い時代であったという事は、最大かつ重要なポイントになるという事を認識しておいて頂きたいと思います。

まずは、最初の LP レコードからの音源・演奏による情報ですが、当時は、CD/ DVD/ YouTube は有りませんでした。LP レコードは大きく分けて、輸入されて翻訳された日本盤と、ダイレクトな輸入盤の 2 種類になります。が、まだまだ輸入盤レコードがた易く入手できる数も無く、また同時に、金管アンサンブルの音源を求めるコアなファンの人数からしてみれば、レコード会社も輸入業者も商品的経済的効果に関しては、かなり悩んだのではないのでしょうか?! しかし一方で、メリットも充分にありました。LP 盤のジャケットはかなり大きく、そこに載っている演奏者たちの容姿や楽器の数々、また、楽曲解説のコメントも大きな情報でした。

さて、これら LP レコードの中で私が音大時代イコール 1970 年代に最も影響を受けた 2 枚がここにあります。

- 「ガブリエーリの饗宴」 ● 「ジャスト ブラス」です。

「ガブリエーリの饗宴」の英語表記は「The Virtuoso Brass of Three Great Orchestras Performing the Antiphonal Music of GABRIELI」ですが、作曲者名の日本語表記は“ガブリエーリ”となっています。楽器編成ではユーフォニアムも参加しています。ジョバンニ・ガブリエリの数々の作品が収録されていますが、PC でタイトルを検索すると、現在でもこの LP レコードの入手は可能です。

次の、「JUST BRASS」は、あの PHILIP JONES BRASS ENSEMBLE(PJBE)の数々のレコードの中でも最も早く市場に出回った物で、1972年版となっています。私が音大 1 年の時になります。収録曲は次の 4 曲です。「Quintet for Brass : M.ARNOLD」「Suite for Brass Septet :S.DODGSON」「Divertimento for Brass Sextet : L.SALZEDO」「Symphony for Brass;V.EWALD」

因みに、このジャケットに載っている PJBE のグループについての解説は、芸大教授でお亡くなりになった 中山富士雄先生で、私の大学院時代の指導教官です。また曲目解説は、現在、洗足学園大学名誉教授の 山本武雄先生です。この PJBE に関しても PC 検索すれば膨大な情報が読み取れますが、これら 2 枚の LP レコードからの影響は、音楽大学在学中の学生のみならずプロ・アマ

関係なく多くの金管アンサンブル愛好家たちに大きな刺激を与えました。さて、次の来日演奏家によるステージパフォーマンスからの情報についての話ですが、当然、PJBE の来日が最も大きな影響を我々に与えたと思います。1974年11月、初来日してからは、金管アンサンブル自主演奏の気運が日本中あちこちで立ち上がり盛り上がりました。

私自身の思い出は、1974年11月13日(水)夜、立川市民会館大ホールでの、そのパフォーマンスには圧倒されました。そして、そのハイな気持ちのまま約10年後の1983年の夏、ロンドンのある練習場でPJBEのリハーサルに一人で立ち合わせてもらい、当時の録音機材でもあったソニーのウォークマンで3時間程カセットテープ収録させて頂きました。が、残念な事に、その時リハーサルしていた曲の題名を、ジョーンズ先生に聞くのを忘れてしまっていたのです。理由は、余りにも難しい曲で、当時私が主宰していた金管アンサンブルでは到底演奏できない曲だと思ってしまったからでした。が、一方では「水上の音楽」の組曲でピッコロトランペットパートのポール・アーチボルト氏が華麗なフレーズを生き生きと吹いていた姿も忘れられません。まるで、私一人に向かって聴かせてくれた様な雰囲気でした!!

後日談となりますが、そのカセットテープ音源を10年程前にCDにダビングして聴いていた頃、私のラッパの弟子で現在日本フィルハーモニーの首席奏者でもある大西敏幸君がリーダーの「Brass Ensemble ZERO 東京」のコンサートが2014年6月にありました。そのプログラムでフィンランドの作曲家による「天使の遊び場」というオリジナル現代曲が本邦初演として演奏されたのですが、ナントその曲は、私が、1983年夏ロンドンでPJBEのリハーサルで聴いたあの難曲だったのです!!当日のプログラムノートには、1981年ヘルシンキでPJBEにより初演されたとあり、私は、再演のためのリハーサルを聴いたのですが、その曲の日本初演は、その時から30年以上過ぎた2014年でした。

さらに後日談。1983年夏のPJBEに参加していたTrp.メンバー、ポール・アーチボルト氏が、2016年秋に深石先生の企画した講習会で再来日し、そのスケジュール調整で我が家に泊まって頂いた時、あの1983年夏のCD音源をダビングして、ポール先生にプレゼントできた事はとてもうれしい思い出で、ポール先生にも喜んで頂きました。深石先生にも感謝です。

さて、このPJBEの来日を皮切りに数多くの金管アンサンブルのグループが来日し多くの影響を残していきますが、編成は、人数的に大きく2つに分けられます。PJBEの様な10名近いグループと、Trp.2/Hrn.1/Trb.1/Tub.1の近代的でもありますが、基本的な金管5重奏のグループです。エンパイアBQ、カナディアンBQ等々が挙げられます。それともう一つ。金管楽器演奏のイメージを根本的に覆したと言おうか、絶大な影響を及ぼしたのが1973年4月に初来日した、トランペットの神様モーリス・アンドレ氏です。私が音大2年になった時でした。東京文化会館大ホール最前列中央の席で聴いた時は、身体中の震えが止まらないという感動を初めて経験しました!!

最後になりましたが、出版楽譜からの情報です。私の音大時代は1972年から1976年ですが、当時の音大生による金管アンサンブルのレパートリーは、それほど多くは無かった時代になります。具体的な曲名で言いますと、ジョバンニ・ガブリエリの数ある作品の中からほんの数曲「ピアノとフォルテのソナタ」「第7旋法によるカンツォン第2番」くらいで、全てアメリカのRobert King版でした。その他のガブリエリの作品でPJBE版やイタリアのムジカララ版が入手できる様になったのはさらに後の事です。楽譜からの情報に関するエピソードを2つ。私が芸大大学院時代に始めた金管十重奏以上の編成による「ブラスアンサンブルソナーレ」でのレパートリーにPJBE版の「オックスフォード伯爵のマーチ」があるのですが、当時、楽譜は国内出版されておらず、メンバーであったトロンボーン奏者の宮下宣子さんによるLPレコードからの“耳コピー”、の手書きの譜面でした!!後に、輸入版の原譜を入手しましたが、宮下版と原譜との

違いは、2nd. Trp と 3rd. Trp. パートの吹く箇所の僅かな違いだけだったのには驚かされました。もう一つ LP レコードからの“耳コピー”エピソード。エンパイア BQ 版の「ウエスト サイド ストーリー」組曲を演奏したい金管五重奏のグループは当時もたくさんありました。が、当然楽譜はありませんでした。そこで、ある優秀な金管プレーヤーが全パート全曲“耳コピー”したのです！瞬く間にひ孫コピー以上に拡がり、日本中の金管五重奏グループのレパートリーになったのですが、後に、本物の輸入版が出版された時、あまり売れ行きが伸びず、出版元の業者が首をかしげたというエピソードも有りました。その様な時代でしたが、輸入版の楽譜も少しずつ増え始めたと同時に、コピーの機械(マシン)も機会(チャンス)も増え始めた時代でした。そして、2Trp, 1Hrn, 1Trb, 1Tub. の五重奏に、最初からユーフォニウムが編成に加わっている金管六重奏曲、ノーマン C ディーツ作曲の「Moden Moods」が、当時の音楽学生たちの貴重なレパートリーでした。

今回この講演にあたり、私の約 600 曲ある金管アンサンブルライブラリーからこの曲を出して中身を確認した所、やはりすべてコピーで 3 種類重なって入っていました。1 番上はフルスコアのみで、1951 年出版アソシエイトミュージック N.Y. とあり、楽器名はユーフォニウムではなく、Baritone のヘ音(低音部)記号表記です。が、そのフルスコアコピー譜の左右の上方には四角形で囲われた怖そうな漢字四文字で“後藤蔵書”の大きなスタンプがドーンと有りました!! さて次の 6 パートのパート譜もコピーですが、6 パート全て 1 ページ目の左上には、四角形で囲われたやはり怖そうな漢字四文字で“深石蔵書”なる大きなスタンプがドーンと有りました!!

さて最後の 3 セット目は、全て手書きのパート譜が 24 枚でしたが、Baritone のパート譜は何故かト音(高音部)記号の in Bb の記譜でした。手書きの筆跡は私ではありませんが入手ルートは記憶に有りません。因みに、コピーするという行為は、著作権違反に当たるという意識は、当時ほとんどの方が持っていなかった様に思います。「アーサー ブラス コンソート」でも、この曲を何回演奏したかわからない位やって来ましたが、Baritone パートは全て深石先生でした!!

最後に、当時 1970 年代、日本の草分け的な活動をした・していた金管アンサンブルのグループ名を少し紹介しておきます。大編成では「上野の森ブラス アンサンブル」ですが、後に金管五重奏の編成に主軸を移していきました。大阪では「大阪シュベルマー金管アンサンブル」、私の Trp. の先生である祖堅方正先生がリーダーの「東京ブラス アンサンブル」、そして、私がリーダーの「ブラス アンサンブル ソナーレ」等ですが、「ソナーレ」は、最初からユーフォニウムをメンバーに加えていました。後に編成をタイトにして「アーサー ブラス コンソート」として 6~7 重奏中心の編成で活動しましたが、勿論ユーフォニウムは深石先生です。金管五重奏のグループでは、「東京金管五重奏団」が挙げられます。名称は現在も同じですが当然メンバー変更されて、現在は私のラッパの弟子の東野匡訓君が参加しています。同属楽器による金管アンサンブルでは「東京バリチューバアンサンブル」「東京トロンボーンアンサンブル」「東京ホルンクラブ」「東京トロンボーン四重奏団」、津堅直弘先生の「トランペット5」はもう少し後に誕生したと思います。その他、まだたくさんのグループが演奏活動して来ましたが、ここ最近の活躍としては「Brass Ensemble ZERO 東京」でしょうか?! また、トランペットのソロ作品も演奏しつつトランペットアンサンブルも披露してきた「ザトランペット コンサート」も注目されていますが、メンバーの岡崎耕二先生は「アーサー ブラス コンソート」にも参加していました。

今回の、私の昔話と自慢話が少しでも刺激になって、皆さん方のこれからの金管アンサンブル活動がさらに活発になれば良いなあ強く思っています。頑張ってください!!

2025 年 1 月 19 日

(第 1 回横浜ユーフォニウム合奏団アンサンブルフェスティバル プログラムより抜粋)